

経済情勢

概観

海外

◇再上昇気配の米国景気

意外に長引いた自動車ストや台風被害を主因に、9月以降一時やや停滞傾向をみせていた米国景気も、その後再びかなり順調な上昇過程にはいりつつあるものとみられる。

景気の長期的見通し、とくに明年後半以降のそれについてはかなり慎重な見方をする向きが米国内部にも少なくないが、当面景気の順調な上昇勢についてはほぼ一致した期待がみられるようである。むしろ当面より問題なのは、今会計年度中70億ドルに上るといわれる財政赤字や、第3四半期に年率30億ドル(第2四半期19億ドル)に達した国際収支の赤字の動向であると思われる。とくに問題なのは、それがドルに対する信頼に影響し、短期資金の移動その他不安定要素となりかねない点であろう。

これに対して政府としては明年度の予算をあくまで均衡化させるとの公約のもとに、不急支出の圧縮方針を打ち出し、国際収支面でも、輸出信用保険の拡大などのほか、短期資金対策としては金融面からする短期金利の上昇促進、為替市場への介入強化など注目すべき動きを示している。こうして米国の政策全般にわたり、国際収支への配慮がいっそう強められていくことは必然の動きと思われる。

◇欧州共同市場の発展と米国の立場

米国の最近の動きとして、いま一つ注目すべきは、英国などの加入に伴う共同市場の拡大発展に備えその対策の検討がとみに真剣味を帯びてきたことである。現在の共同市場が強い欧州主義に立

脚している点からみて、米国が英国と同じ立場でこれに参加しうる可能性は当然考えられないとすれば、米国が共同市場発展の利益に均てんする方法は、GATTなどを通じ共同市場の対外関税の全般的な引下げに努めるかたわら相互的なベースで関税引下げを進めるほかはない。このほどケネディ大統領が、来年6月互恵通商法の失効を機として大統領の関税引下げ権限の拡大を要請しようとしているのはかかる意図に基づくものである。国内の保護貿易主義者の根強い努力もあって問題はかなりの難航も予想されているが、合理的な世論の大勢は政府の意図を支持していると伝えられている。これは貿易自由化が動かしがたい世界的な気運であることを示すものであろう。

一方、米国政府は11月中旬のOECD閣僚会議で加盟国のGNPを1970年までに50%(年率4.6%)増加する提案を行なった。欧州大陸諸国にとっては過去の実績からみても本目標を達成することはさして困難ではなく、結局問題は米・英およびカナダの成長促進となるが、米国の成長促進のためには拡大発展する共同市場との貿易交流の増大が必須の要件となる。したがって本提案のねらいも、ソ連との経済競争という政治的意図を別とすれば、これまた米国の共同市場接近意図の表現とみられないことはない。

国内

◇商品市況は一段と軟化、一方生産の増加続く

10月を中心とした商況は、燃料、セメント、合板など一部に底堅い動きがみられたほかは、需要期にもかかわらず総じて軟化の色を濃くしその範囲も広まってきた。こうした市況を反映して本行

卸売物価(食料を除く)も9月中旬以降落勢を続け、10月には前月比-0.7%の下落を示した。市況軟化の原因には、安値輸入品の出回りとか新增設備の稼働開始に伴う供給面の圧迫もあるが、金融引締めによって問屋筋を中心に資金繰り難に基づく在庫手控えが進められてきたことが主因である。

一方、9月の鉱工業生産は季節調整済みで前月比+0.8%と続伸している。9月の生産増には、前月の夏季休暇減産(自動車)の反動増もあるが、反面、当月は第2室戸台風や定期修理の一部繰上げなどによる一時的減産要因もあり、総合してみれば生産の増勢が従来に比してとくに変わってきたとはみられない。企業の生産気構えからいっても総じて強気を変えておらず、現に10月の生産は大幅増となった模様である。こうした生産増加の反面、9月の出荷は季節調整済みで0.6%減少し、生産者製品在庫が+2.6%の増加となったことがやや目立った。製品在庫増加のごく一部には、問屋あるいは実需筋の在庫保有態度の変化などによる売れ行き減退に基づくものもあるとみられ、またこれに伴い将来の生産調整を検討しはじめた向きもないではないが、こうした動きが今後さらに強まっていくか、一時的、部分的なものにとどまるかは注目を要しよう。

◇国際収支に若干の変化散見、大幅赤字の大勢変わらず

10月の国際収支は総合で106百万ドルの大幅赤字を続けた。経常収支は、輸出の伸び悩み、輸入の高水準持続から76百万ドルの赤字を示し、改善のきざしはみられない。資本取引も決済超過による輸入ユーザンスの減少、ユーロ・ダラーの大幅引揚げなど短期資本の流出により30百万ドルの赤字を示した。最近の輸入信用状や輸入承認は若干減勢に転じたが、これらには、担保率引上げ直前

のいわゆる駆け込み承認の反動や、輸入業者の資金繰り難による信用状開設、輸入承認申請の引延ばしの動き、あるいは担保率手直しのおもわくによる承認申請の手控えなど特殊要因によるところが多い。また輸入業者の資金繰り難を反映して、一部輸入素原材料に在庫調整と輸入手控えの動きもみられるが、現在の輸入原材料在庫水準や生産動向からみれば、こうした動きをもって直ちに傾向的なものとみることはできない。また10月の輸出入信用状が43百万ドルの黒字となったことも、季節的な事情や信用状なしの貿易における赤字幅と考え合わせると、貿易収支の改善が大きく進んでいる証左とはみられない。

◇金融の引締め進む

この間金融面の動きをみると、10月の銀行券は平均発行高で前年同月比23.0%増と、8月以降の増勢落ち着き模様をいっそう深めている。また10月の全国銀行貸出は491億円の増加をみたが、増加額は前年同月を4割方下回った。とくに都市銀行の貸出抑制が著しいが、従来比較的増勢の強かった地方銀行貸出もかなり増勢が鈍化してきた。このような貸出抑制の本格化に伴って企業金融もとみに引締めをみせており、企業筋には当月も引き続き預金の引出し、有価証券の処分など流動性を取りくずす動きが目をつけた。全国銀行実勢預金が月中1,095億円と大幅の減少(前年同月124億円増)を示したこともこのような情勢を反映したものである。

以上のように金融引締めの影響は流通部門の在庫圧迫となってしだいに浸透してきているが、一方生産、投資の動向にはまださしたる変化は認められない。したがって企業の資金需要はなお旺盛さを続け、銀行貸出の抑制との間に金融ひっ迫感をいっそう強めてきているのが現状である。